



Title	フランス語における擬態語および関連表現について
Author(s)	春木, 仁孝
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 41-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85032
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランス語における擬態語および関連表現について

春木 仁孝

1. はじめに

一般にフランス語には擬態語は存在しない、あるいは存在しても僅かであるとされる。筆者は春木(2012)においてフランス語のオノマトペを考察する中で、現代フランス語に見られる擬態的と考えられる表現についても若干の考察を行なった¹。そこで取り上げたのは、une fille pétillante「活発な女の子」という表現である。この pétillant(e)という形容詞は

(1) pétiller「(薪が)パチパチはぜる、(発泡性の飲み物が)泡立つ」

という動詞の現在分詞に由来するものである。もとの動詞は、フランス語に数多く存在するオノマトペ効果を持つ部分を内包する動詞である。この場合は擬音語的なオノマトペ効果を持っていると考えられる。シャンパンやサイダー類が泡立つときには日本語では「シュワー」という音で表現するが、細かい泡が次々とはぜる音はプチプチやパチパチとも表現できる。シュワーという表現はそれらの細かい音を全体的・総合的に捉えたものと言える。いずれにしろ、そのような音と共に泡がはじける様子、さらには薪がパチパチはぜる様子には連続的で活発な動きが観察される。そこからこの動詞の現在分詞に由来する形容詞 pétillant [petija]は「パチパチはぜる、キラキラ輝く」といった意味から、人を形容するときには「元気のよい、はつらつとした、才気溢れる」という意味になる。たとえば une fille pétillante という表現があるが、これはまさに「ピチピチとした(若い)女性」と訳せる²。薪がパチパチはぜる様子や泡が盛んにピチピチ、パチパチとはじけている様子が、活気のある様子として人の性格という領域に転移されていると分析できる。つまり擬音語的な意味が擬態語的な領域へと拡張されているのである。

このような例を見るとフランス語にも確かに擬態語が存在していることが分かる。本稿ではフランス語のオノマトペの中の擬態語および擬態語的表現と、それらに関連して準オノマトペ的表現とでも呼べる表現について若干の考察を行ないたい。

2. 様々な擬態語

2. 1. 擬音語から擬態語へ

上で見た pétillant のように本来擬音語であった表現が、その音を伴う現象の様態へと意味を拡張させて擬態語が生まれるという現象は普遍的なものであろう。そのように表現の適用領域が拡張される際に、もともとの擬音語的な側面がある程度残る場合から純粹に様態だけを表わす場合まで、程度に違いがあるように思われる。une fille pétillante という表現には、燃えている薪や発泡性の飲み物の泡の活発な動きだけでなくそれらの音のイメー

¹ 以下、例(16)までに挙げた例と説明には春木(2012)の内容と重複するところがあるが、当該論文はウェブのみで閲覧可能であり、リンクの変更などもあり今後もアクセスに不安があるので、あえて繰り返しを厭わなかった。

² いくつかの仏和辞典では un esprit pétillant が「溢れる才気；才気煥発な人」などと訳されているが、une fille pétillante の場合は「活発な、はつらつとした」という訳がふさわしいと考えられる。

ジが多少とも重なっていると思われる。一方、*un œil pétillant*「キラキラ輝く眼」や *un ciel pétillant d'étoiles*「星でキラキラ輝く空」といった表現には音のイメージは希薄であり、視覚的な効果を表現しており、完全に擬態語的な表現であると考えられる。つまり、ここには先ず擬音語が比喩的に擬態語的に用いられ、さらに意味の拡張が進むとより純粋な擬態語になるという過程が想定できる。しかし擬態語そのものが少ないフランス語では、擬音語に由来する擬態語もあまり多くは見られない。これまでに何度か取り上げた

(2) *froufrouter*「(衣服・葉などが) 軽く音をたてる、サラサラと音をたてる」

という動詞から派生した名詞 *froufrou* には「サラサラ／カサカサ (という音)」という意味以外に「リボン・レースなどの婦人服の飾り、フリル」という意味があるが、これなどももともとは「サラサラという音をたてる飾り」という意味から「(そのような音をたてそうな) ひらひらとした飾り」という様態的な意味に拡張されており、擬態語的な名詞と言える。やはり *f* や *r*、(そして *s*) の音を含む

(3) *frémir*「震える、軽い音をたてて揺れる」(名詞: *frémissement*)

(4) *frissonner*「(身体が) 震える、(ものが) 揺れる; かすかな音をたてる、そよぐ、ざわめく、せせらぐ」

などの動詞およびその派生語も、「(寒さや熱などが原因の) 身体の震え」を表わす場合には擬音的側面が捨象されて、日本語の「ブルブル震える」などと同様の擬態語的表現になっていると言える。ただこれらの表現が音を表わしている場合も、同時に様態をも表わしていると考えられることも多く、以下の様な例におけるように擬音語的側面と擬態語的側面を切り離すことができない場合も多い。

(5) *Le feuillage frémit au vent*. 「葉むらが風に (サラサラと) そよいでいる」

(6) *Les feuilles frissonnent sous la brise*. 「そよ風に木の葉が (サラサラと) そよいでいる」

2. 2. 本来的に擬態語と思われる場合

次に本来擬音語ではない語彙で、擬態語的な意味を持つと考えられる例を挙げてみよう。*branler*「グラグラする、揺れる」という動詞は語源的にはオノマトペではないようだが、日本語では「グラグラする」のように擬態語が対応する。一方、フランス語の *branler*「揺れる」という動詞そのものにオノマトペ効果を認めるのは難しい。しかし、現在分詞に由来する形容詞を用いた *un cou branlant*「グラグラ揺れる首」のような表現には破裂音と流音に鼻母音[ã]の繰り返しが加わって、まさに日本語の「グラグラ」に対応するようなオノマトペ効果を感じ取れるのではないだろうか。何らかの揺れを表わす表現にはある程度の擬態語的な効果を感じ取れるものが多い。たとえば *balancer*「揺り動かす、揺する」、*balançoire*「ブランコ」などの語にも同様の効果があるとは言えないだろうか。「揺れる」を表わす *trembler* や *trembloter*、さらには *osciller*, *vaciller* にも幾分かオノマトペ効果が認められる。また *marcher les bras ballant*「腕をぶらぶらさせながら歩く」なども同様である。

このほかに擬態語的な語として春木(2012)では以下のようなものを挙げた。

(7) *zigzaguer*「ジグザグに進む」、(8) *briller*「キラキラ輝く」、(9) *piquer*「チクッと刺す」、

Ex. Ça pique. 「チクチクする」、(10) chatouiller 「くすぐる、チクチクする」、(11) gratter 「ひっかく、チクチクする」、(12) tituber 「ふらつく、よろめく」

gratter は「(固い物を) (ガリガリ) ひっかく、削る」という意味の場合は擬音語でもあり擬態語でもあるが、Ça me gratte ce pull. 「このセーターはチクチクする」のような表現では触覚的な様態を表わす擬態語である。

2. 3. Enckell et Rézeau(2003)に見られる擬態語

ここまでに見てきた表現は、動詞、そして現在分詞から派生した形容詞であった。それはフランス語においてはオノマトペ効果を持つ要素が動詞の中に取り込まれていることが多いからである。もちろんフランス語にも独立して用いられるオノマトペは多くあるが、それらは副詞的な性格を持つ日本語のオノマトペとは違って、間投詞的であり、日本語におけるように文の副詞的構成要素として用いることは難しい³。そのような間投詞的オノマトペもほとんどが擬音語であるが、わずかに擬態語的なものも存在している。以下に挙げたのはオノマトペの辞書である Enckell et Rézeau(2003) の収録語の中で筆者が気付いた擬態語的な説明がついたものである。フランス語の定義はその辞書のものである。

(13) gla gla = 寒い感じを表わす *marque une sensation de froid* 「ブルブル、ガタガタ」

(14) hop = 跳ぶこと、登ること、急激な動作を表わす *marque un élan, un saut, une escalade, un geste rapide* 「エイッ、ヤッ、パッ」

(15) prrt, prout = 急に行ってしまうこと、急に姿を消すことを表わす *marque un départ ou une disparition rapide* 「ドロン、パッ」／無関心、軽蔑、拒否を表わす *pour marquer l'indifférence, le mépris, le refus* 「フン」

(16) miam-miam = 美味しいと思っていることを表わす *marque une appréciation gustative favorable*⁴

(14)(15)のような例とも関連するが、フランス語には状況の突然の変化を表わす一連の擬態語が存在している。たとえば *plop* は本来的には瞬間的な軽い音を表わす擬音語だが、状況の突然の変化を表わして用いられることがある。急に人が亡くなったり姿を消したりした場合や、人が突然態度を変えたような時に用いられる。

(17) Puis le sommelier (...) déboucha la seconde bouteille — *Plop!* (Enckell et Rézeau (2003)) 「それからソムリエが二本目のボトルを開けた。ポン！」

(18) Un soir il était mort, *plop*, comme ça, d'un coup, sans prévenir. (Enckell et Rézeau(2003)の例を一部改変)

「ある晩、彼は亡くなってしまった、ぽつくりと、突然、何の前触れも無く」

³ フランス語のオノマトペは文中においても間投詞的に用いられることが多いが、主語や目的語、あるいは前置詞と共に文の構成要素として名詞的に用いられることも少なくない。ただし、その際のオノマトペの「名詞性」の程度については様々な問題がある。また前置詞なしで副詞的に用いられている例も少数ながら見つかる。フランス語におけるオノマトペの構文要素としての振る舞いとその問題については春木(2013, 2020)を参照されたい。

⁴ この語には擬態語的な側面と共に擬音語的な側面もあると考えられる。いずれにしろ、日本語にはびったりと対応するオノマトペはない。パクパク、モグモグ、ムシャムシャなどは食べている様子を表わすのであって、美味しく思っていることを表わすことに特化している表現ではない。

plop と同様に他にも瞬間的な音を表わす擬音語が、急激な変化を表わして擬態語的に用いられることがフランス語ではよくある。石野(2015)でも引用されているが、Enckell et Rézeau(2003)では解説部分において、「音とその抽象化」*bruit et abstraction* という項目を立てて本来は擬音語であるものが音以外のものを表わすために用いられる場合を挙げている。「痛み」を表わす場合など擬態語的でないものを除くと以下のような例が挙げられている。

突然の消失 (*disparition soudaine*) : *fft, pcht, pff, pft, (piouf, vrip)*.

事態の素早さ、事態の突然性 (*rapidité ou soudaineté d'un procès*) : *badaboum, boum, clac, clinc, cloc, crac, cric crac, flop, hop, paf, pan, pif paf, plaf, ploc, plof, plop, pof, pouf, poum, prr, ran, schlac, schlaf, tac, tchac, tchiac, toc, vlam, vlan, vrrt, wham, zip, zoum, zoup, (djinn, fchiaff, froumm, zioupe, zac, zit). [poc, plouf, pst]* ⁵

このリストには(14)の *hop* が含まれているが、*hop* には音を表わす用法はないので「この一覧からは除外すべきである。一方、(15)として挙げた *prrt, prout* の意味は上の一連の語と共通しているが、Enckell et Rézeau(2003)による限りこれらの語に音を表わす用法はないので、この2語が上のリストに含まれていないのは妥当である。

Enckell et Rézeau(2003)が解説部分において「音とその抽象化」という項目のもとに記しているのは、「攻撃」*agressivité* (*grr* など3語)、「痛み」*douleur* (*aïe* など3語)、「反撃」*riposte* (*tac, toc* の2語)を除けば、その大半が上に挙げた「突然の消失」「事態の素早さ、事態の突然性」を表わすものである。これらは「事態の突然性」として一つのカテゴリーにまとめることができる。翻って日本語ではこの意味に対応するオノマトペを考えると、パツ、サッ、ドローン、ヒラリ、ハラリ、ストンなどがおもい浮かぶが、ヒラリ以下は擬音語的な側面が強いように思われる。いずれにしろ、事態の突然の変化を表わすフランス語のオノマトペの豊かさは際立っている。一般に擬態語が少ないとされるフランス語においてはこの事実は奇異に思える。ただここで問題なのは、日本語の擬態語といわれる表現は基本的には具体的な様態を表わしているのに対して、上のフランス語の一連の語が表わしているのは抽象的な状況であるという点である。まさに Enckell et Rézeau(2003)が解説で用いている「音と抽象化」という表現通り、「事態の突然の生起・変化」というのは抽象的に捉えられた状況である。その意味で上のフランス語の一連の表現は擬態語というよりも擬況語とでも言うべきものであり、日本語の擬態語とは性格を異にするとと言わざるを得ない。

もちろん日本語にも一定の状況に対するオノマトペはあるが、それらはたとえば、ガヤガヤ、ザワザワ「騒がしさ」、シーン「静けさ」、ゴチャゴチャ「混雑、混乱」のように具体的な状況に対応している。このように考えると、擬況語的なものは一定数存在するものの、やはりフランス語には日本語のようなタイプの擬態語は少ないと考えられる。

因みに春木(2020)で考察した「et+オノマトペ」という構文も「事態の突然の展開」を表わしていたが、この構文に現われるオノマトペには本来擬音語である *clac, bing, vlan, boum*

⁵ *piouf* および *djinn* 以下の()内のは解説部分に実例が挙げられているものの、辞書の項目としては立てられていない。書き手の個人的なバリエーションと考えられる。なお、他にこの辞書の項目で擬音語が拡張によって事態の突然性を表わすことが記されているにもかかわらず一覧に抜けているもので筆者が気付いたものを[]で補った。

などもあるが、上で見た *hop* の頻度も高い。また擬音語が使われている場合も擬音と「状況の突然の展開」を共に表わしており、「*et*＋オノマトペ」という構文は擬況的な表現であると考えられる。たとえば以下の例ではもともと「爆発や物の落下による音」を表わすオノマトペの *boum* が音とは関係なく完全に比喩的に状況に関して用いられている。

(19) *J'ai ouvert l'œil et boum, tout m'est apparu.*

(Marie Darrieussecq, *Notre vie dans les forêts*. 2017 : 11)

「私は眼を開けた、するとバーン、一気にすべてが私の眼に入ってきた」

3. 擬態語的表現の検討

フランス語の擬態語については石野(2015)が多くの表現を挙げているので⁶、それを参考にさらに検討してみよう。石野氏は擬音語が擬態語に移行したものとして、以下を挙げる。

(20) *blabla, charivari, couac, guili(-)guili, pioupiou, tagada, tintin, toc, tralala, zinzin, tsoin-tsoin(tsouin-tsouin),*

最初に確認しておくが、石野氏が擬態語として挙げる場合のほとんどが名詞であり、擬態語と言われて一般に思い浮かべる類の表現とは異なっている。この点については後で考えたい。いずれにしろ(20)の表現が擬態語と考えられるかどうか少し検討してみよう。

たとえば *couac* は調子はずれの音を表わす擬音語として間投詞的に用いられるが、そこから調子外れの音、不協的な音を指す名詞として用いられ、さらに「不一致、不調和」という意味の名詞として用いられる。何らかの音を表わす名詞として用いられる場合は擬音語的な名詞ということができるが、「不一致、不調和」という意味の名詞としての *couac* を擬態語ということができるだろうか。これは「不協的な音」という意味が比喩的に状況に適用されているだけであると考えたべきではないだろうか。日本語では、「ギクシャクとした関係」のように名詞部分とオノマトペの部分が別々になるのでオノマトペであるかどうかを判定しやすい。一方、フランス語では動詞の場合もオノマトペが動詞の中に含まれていたように、名詞の場合もオノマトペそのものが名詞になるので、何らかの音に言及している擬音語の場合はよいとしても、擬態語かどうかを判定するにはいろいろと問題がある。

元々はひよこを意味する *pioupiou* は明らかにオノマトペ起源であるが、現在は「(若い)兵卒、単なる兵卒」を意味する。日本語のひよこもオノマトペ起源であり、また未熟な人間の意味でも使われる点はフランス語の *pioupiou* と似ている。しかし日本語で未熟な人を指して「ひよこ」という言葉を使ったときにこれを擬態語的表現と考えることはないだろう。*pioupiou* はあくまでも擬音語的な語の比喩的な意味の拡張と考えるべきである。

元々は鐘や鈴の音を表わしていた *tin tin* は名詞、間投詞として「何もないこと、からっけつであること」を表わすが、これがどうして擬態語的表現になるのか。何らかの要求のために鈴を鳴らしても無駄であったところから名詞・間投詞の意味が出来たのではという

⁶ 石野(2015)はフランス語の語彙の諸相について広く解説したものであって、個々の表現について深く論究したものではない。また、ある表現を擬態語とする根拠をいちいち述べてはいない。ただ擬態語的な表現をまとめて挙げている数少ない文献であり、私が検討したい表現と多くが重なるので、擬態語を考察する出発点とさせていただいた。

説明もあるが、もしそうならば擬音語の比喩的用法になる。

物がぶつかったときのコツコツという音を表わすオノマトペ *toc* には名詞としては「偽物、まがい物」、形容詞としては「偽物の、まがい物の」という意味がある。これは昔から一部の方言でいかさまや策略を何かを軽く叩くことを意味する表現で表わしたことによる。そうだとするとこれらの意味は擬音語としての用法の延長線上にあるのではないだろうか。

zinzin 「エンジンなど騒々しい音→(名詞) 頭が少しおかしい人、(形容詞) 頭が少しおかしい」については擬音語的な意味と名詞や形容詞としての用法との関連が明瞭ではなく、いずれにしろ擬態語と認定する根拠が判然としない。

不信・喜びを表わす間投詞である *tralala* については起源的には歌のリフレインから来ているようだが、そこから不信や喜びを表わす背景的音楽として間投詞的に使われているかと推測される。これはオノマトペ起源の間投詞であるが、「派手な装飾、華美; 気取り」という名詞用法への拡張の道筋はよく分からない。擬態語的と言われても納得し難い。

blabla 「おしゃべり」、*charivari* 「大騒ぎ」は擬態語ではなく、やや比喩的に使われているものの、あくまでも擬音語であると考えられる。

(20)の中で擬態語的と思われるのは *tsointsoin* である。「ちゃんちゃん(歌の中での楽器による合いの手)→念入りな」は合いの手から評価・称賛の意味が派生して、また音が近い *soin* 「入念さ」の影響もあって「念入りな」という意味が生まれたと説明される。

さらに擬態語と考えられるのは「馬の駆け足の音」を表わす *tagada* の以下のような用法である。以下は石野氏が引く例である。

(21) *Le mois d'août, tagada-tagada, s'achève.*

「8 月は馬の駆け足のようになつという間に終わる」

この例では *tagada-tagada* が間投詞として文中に挿入されているが、副詞的に用いられる日本語のオノマトペと同じような機能を果たしている。石野氏の訳では「馬の駆け足のように」となっているが、「パカパカと駆ける馬のように」ということで擬音語的な側面も残しつつもそのような音をたてながら疾走する馬の速さへと意味の焦点が移行しているということで一応擬態語的表現と考えることができるだろう。

guili(-)guili については、たとえば *faire guili(-)guili à qn.* 「...にこちょこちょする」のような名詞用法もあるが、くすぐる時に言う言葉であり、これはむしろ擬音語である。

以上、石野氏が擬音語起源の擬態語として挙げた表現を検討した。おそらく石野氏は形態的にオノマトペ的であって、元は擬音語であるものが音以外の領域の意味を表わすようになった表現を擬態語的とみなしているのかと考えられる。

さらに石野氏は擬音語に起源をもたない本来的な擬態語として以下の表現を挙げる。

(22) *cahin-caha* [kaẽkaa] 「どうにかこうにか、かろうじて」; *clopin-clopant* [klɔpẽklɔpã] 「足を引きずって、えっちらおっちら」; *chouchou, -te* (名詞) 「お気に入り、秘蔵っ子」(cf. *chouchouter* (他動詞) 「...を甘やかす、ちやほやする」、*chouchoutage* (n.m.) *chouchouter* の名詞); *cracra* 「垢だらけの」; *flafla* (n.m.) 「見せびらかし」; *fric-frac*

(n.m.) 「押し込み強盗」; **gnangnan** [ɲɑ̃ɲɑ̃] (形容詞) 「ぐちっぽい、軟弱な、[物語など] お涙ちょうだいの、(名詞) ぐちっぽい人、軟弱な人」; **méli-mélo** (n.m.) 「まぜこぜ」; **pêle-mêle** (n.m.) 「ごちゃまぜのもの、(副詞) ごちゃごちゃ (に)、乱雑に、雑然と」; **ric-rac** (副詞) 「きっちり、ぴったり; ぎりぎり」; **tohu-bohu** [toyboy] (n.m.) 「(天地創造以前の) 混沌、大騒動、大混乱; 喧騒」; **bataclan** (n.m.) 「雑多なもの、ごたごた」; **chochette** (n.f.) 「気取った女; 女性っぽい男性、(形容詞) 気取った」; **nanan** (n.m.) 「砂糖菓子、甘いもの」; **perlimpinpin** [perlɛ̃pɛ̃pɛ̃] (n.m.) 「いかさま、いんちき、絵空事」
 上記の語は大半が繰り返しあるいは部分的繰り返しを含み、形態的にはオノマトペらしい様相を示している。先ず **clopin-clopant** の語根は「足が不自由な、不揃いの」という意味のラテン語の語根、そして古期フランス語の動詞 **cloper** に遡ることが出来るが⁷、接尾辞と繰り返しを伴うこの形は明らかにひょこひょこ足を引きずって歩く様子を擬音語的に表わしていると考えられる。**gnangnan** については前にあげた咀嚼音を表わす **miam-miam** に似て元はぶつぶつと文句を言う様子を表わす擬音語である。また **bataclan** も起源的には物の落下音を表わす擬音語だったとされる。**flafla** は太鼓の 2 拍子打ちを表わすオノマトペ起源の **fla** の反復形だとすると元は擬音語になる⁸。以上の表現については(20)の擬音語が擬態語へと拡張されたケースに含むべきものである。

perlimpinpin については魔法の呪文をそれらしく真似たものではないかとされ、その場合は一種の擬音語になるが、確かなところは分からない⁹。**nanan** も幼児語によく見られる(擬音的?) オノマトペ的要素の **nan** からとされるが、**nanan** そのものが擬音語であったかどうかは定かではない。これらの 2 語については不確かな点があるが、いずれにしろ(22)のうち以上を除く表現はオノマトペ以外の語源を持っている。

「お気に入り、秘蔵っ子」を意味する名詞 **chouchou** は反復形式でオノマトペ的な雰囲気を持っているが、これは「キャベツ」を意味する **chou** が所有形容詞を付けた呼びかけ語として恋人や子供に対して「愛しい人、可愛い子」の意味で用いられる用法からのものであり、オノマトペではない。なお **chochette** は意味から **chouchou** や形容詞 **chouchouté** に関係づける説と、**cocotte** 「娼婦」(起源は鶏の鳴き声でオノマトペ) の変形と考える説とがあり、またオノマトペ動詞 **chuchoter** 「ささやく」の影響もあるとされる。**cocotte** 説を取ると遠く起源的には擬音語になるが、**chochette** そのものには擬音性はない。

cahin-caha は **cahot** 「でこぼこ道、(でこぼこ道を行く車の) 揺れ」、**cahoter** 「揺れる／揺り動かす」などの語と関係するようである(ラテン語起源説は取らない) が、**cahin-caha** という形はオノマトペと見なしていいだろう。**pêle-mêle** は古期フランス語の **mesler** 「混ぜる」の命令形の反復による表現で、語頭の繰り返しを避けたものであり、様々なヴァリ

⁷ このラテン語の語根は人名の **Claudius** や **Claude**, **Claudia** などにも含まれている。また動詞 **cloper** は現代フランス語では接尾辞を伴う派生形の **clopiner** という形で残っている。

⁸ **flafla** の意味には動詞 **flatter** 「へつらう」の語根の影響も認められるとされる。

⁹ **Barbara** のシャンソンに **Perlimpinpin** というタイトルのものがあるが、これは **Barbara** が子供時代に住んでいた地域の公園内の地域住民達の共同管理による庭園の名前にちなんでいる。子供に取ってはわくわくさせる名付けである。

アントが存在したが *méli-mélo* もその一つである¹⁰。これらは例外的に名詞の場合も含めて擬態語と考えてよいように思われる。

ric-rac は副詞として「きっちり、ぴったり」という意味を表わす（例： *J'ai payé ric-rac le loyer de ce mois.* 「私は今月の家賃をきっちり払った」）¹¹。母音の異なる二つの要素を重ねているところなど、形態的にはオノマトペ的である。問題は、はたして *ric-rac* が「きっちりそれだけ」という意味と感覚的につながるのかどうかということである。語原的につながる *riquiqui* 「ちっぽけな、粗末な」という性数無変化の形容詞もあるので、*[rik]* という音がフランス人の感覚の中で「小さいこと、少ないこと」を喚起するのかもしれない。

fric-frac はもともととは二つの別々の側を叩いた音を表わしていたようだが、「押し込み強盗」への意味の拡張はよく分からない。「お金」を意味する *fric* への連想はあつただろう。

cracra は *huile cracra* 「とても汚れた油」のように形容詞として用いられる。*cracra* は *crasseux* 「垢だらけの、ひどく汚い」という形容詞の第一音節を繰り返したもので、繰り返しと性数無変化という点でオノマトペ的な性格も見えるが¹²、この語に「ひどく汚れた」という感じを持つのはやはり元の語 *crasseux* を喚起させるからである。ただ、同じ意味のよりくだけた形として *cradingue*, *cradoque*, *crado*, *crade* など一連の語があり、*cra[kra]* という音が「汚さ」を喚起しやすいということはあるだろう。結果的に *cracra* という語の響きそのものにフランス語話者に汚さを感覚的に喚起させるものがあるのかもしれない。

tohu-bohu は学術的には旧約聖書で用いられた語源のヘブライ語の意味である「(天地創造以前の) 混沌」を表わすが、日常語としては「大騒動、喧噪、大混乱」を意味していて、どちらかと言うと喧噪のような音に重点がある。もしもオノマトペと認定するとしても、擬音語的側面の強いオノマトペ名詞ということになる。

4. 擬態語の問題点

主として石野(2015)が擬態語として挙げる表現を検討してきたが、擬態語を考える上で二つ問題点がある。一つは石野氏が擬態語として挙げる表現の多くが名詞であるという点に関連する。日本語話者にとって、オノマトペは単独で間投詞的に用いられたり、「ピカピカの新車」のように形容詞としても用いられるが、基本は文中で副詞的に用いられる表現である。春木(2017)で多少触れたように、ガラガラ（赤ん坊のおもちゃ）、プチプチ（気泡梱包材）のようにオノマトペ、それも基本的には擬音語がそのまま名詞になったオノマトペ名詞のようなものもあるが、それらは石野氏が擬態語として挙げるたとえば *toc* 「偽物」、*fric-frac* 「押し込み強盗」のような名詞とは性格が違っている。

この問題は擬態語に関する二つ目の問題とも密接に関わってくる。それはどのような基

¹⁰ 英語に同じ意味の *mishmash* という表現があるが、これも古英語の混ぜるという動詞から来ているのは興味深い。

¹¹ *ric et rac*, *ric-à-rac* という形もある。古くは *ric-à-ric*, *au ric* などの形も存在した。また意味は「ぎりぎりそれだけ」「必要最小限」というようなニュアンスが強い。

¹² 繰り返しはこの語がもともと幼児語であるからだと思われる。男性女性に関して無変化であるのも *crasseux* の最初の音節を繰り返して作られた非正規語的な性格によると考えることもできる。

準である語を擬態語と認定することが出来るのかという問題である。擬音語においては表現形式（シニフィアン）と意味内容（シニフィエ）の関係は 100%恣意的なものではなく、各言語によって慣習化されてるとは言え一定のつながりを認めることができる。これに対して擬態語の場合は、当該の言語の中で一般の語彙とは異なる特定の言語形式、たとえば繰り返しや母音の一部、子音の一部の変化を伴う反復形式を取るなどその言語のオノマトペに特有の形式を取り、かつ明らかに何らかの意味を喚起する語根などが含まれていないことといった条件が考えられる¹³。擬態語における表現形式と意味内容の関係は長年の使用を通じてその言語の中で慣習化されたものであるが、やはり音のレベルで感覚的に訴えるものがあることが多いと思われる。それは擬音語の場合にも見られるように多くの言語で同じような感覚を喚起する場合と、当該の言語の音システムの中である感覚を喚起する場合とがあるのではないだろうか。たとえば日本語で「胃がきりきりと痛む」と言った場合、破裂音[k]と狭母音[i]があることで鋭さが喚起されて鋭い痛みを表わしていることが日本語話者にはよく分かる。しかし、一般に非ネイティブにはある言語の擬態語が感覚的に喚起するものを感じ取るのは容易ではない場合も多い。

石野氏が擬態語として挙げる名詞については感覚的な意味を表わしているわけでもなく、「偽物」「押し込み強盗」のような一般的な意味を表わしており、その点からも一部を除きこれらの名詞を擬態語と認定するには無理がある。前に見たように擬音語を用いた名詞はいろいろとあり、オノマトペ名詞とでも呼べるが、擬態語を用いた名詞はたとえ存在しても数少ないことが予想される。たとえばひらひらする飾りを「ひらひら」と呼んだとするとこれは擬態語的名詞ということになるが、そのような例は殆ど思い浮かばない。

以上のように考えると石野氏が挙げる(20)(22)の表現のうち、擬態語と考えてもいいのは副詞あるいは形容詞として用いられる *clopin-clopant*, *tsoin-tsoin*, *tagada*, *cahin-caha*, *pêle-mêle*, *ric-rac* ぐらいに限られるのではないかと思われる。

5. まとめと補足

フランス語では独立した表現としてのオノマトペも数多く、また筆者がこれまでに見てきたように、動詞の中に取り込まれた形でのオノマトペも多い。しかし、それらは殆どが擬音語である。本稿でも見たように、フランス語にはやはり擬態語は非常に少ないと考えられる。特に石野氏の例に見られるような名詞を擬態語とすることには問題がある。

一方、フランス語には事態の突然性や事態の突然の展開を表わす擬況語は比較的たくさん存在するが、これは事態のありようを感覚的に表現する擬態語とは性格を異にする。

ところでフランス語には形式上、オノマトペに似ていたり、通常の音型とはやや異なる以下の様な表現が存在する。

(23) *brouhaha*[bruaa] (名詞)「ざわめき、どよめき」; *cohue*[kɔy]「騒々しい群衆、雑踏」;
trictrac (名詞)「西洋双六」(サイコロの音から); *bric-à-brac* (名詞)「骨董、がらくた

¹³ もしこのように考えるならば、前に挙げた *cracra* は擬態語からは除外されることになる。

の山」；*de bric et de broc*（副詞）「行き当たりばったり」（*bric et broc*（形容詞））；*pile-poil*（副詞）「ちょうどぴったりに、まさにその通り」；*dare-dare*（副詞）「大急ぎで」；*micmac*（名詞）「混乱、陰謀 悪巧み」；*sac et ressac*（名詞）「寄せ波引き波」；*pique-nique*（名詞）「ピクニック」；*en catimini*（副詞）「こっそりと」；*illico (presto)*（副詞）「すぐに」；*couci-couça*[*kusikusa*]「どうにかこうにか、まあまあ」（cf. *comme ci comme ça*）ここに *peu ou prou*（副詞）「多かれ少なかれ」、*sain et sauf*「無事に」（そして上に挙げた *pile-poil*）のような頭韻を踏んだ一部の熟語を加えてもよいだろう。これらの表現のうち *trictac*, *bric-à-brac*, *de bric et de broc*, *bric et broc* のように語源的にはオノマトペ起源のものもあるが、その他はヘブライ語起源(*brouhaha*)であったり、ブルトン語起源(*cohue*)であったり、ラテン語からの借用(*illico*、なお *presto* はイタリア語からの借用)であったり、ピカルディ方言から(*en catimini*)であったり¹⁴、スペイン語からの敷き写し(*sac et ressac*)であったり、イタリア語起源(*couci-couça*)であったり、中世オランダ語起源(*micmac*)であったりと様々であるが、いずれにしろこれらの表現には音のレベルでの「遊び」が感じられる。石野氏が挙げていたものも含めてこれらの表現の大半が口語的であり、オノマトペ同様に感覚的で擬音的、擬態的な効果を幾分かは感じさせる表現も多い。

擬態語についてその基準やひいては認定の仕方などを厳密に考えることも重要であるが、それと同時に(20)(22)(23)に挙げた様な一連の表現を、特に話し言葉に見られる言葉の「遊び」、そしてオノマトペも含めて特定の音や音の組み合わせによる表現性という観点から捉え直してみることも、人間の言語活動のあり方を考える上で意味があると思われる。

[参考文献]

- 石野好一 (2015)：「フランス語を知る、ことばを考える ―語彙の諸相―」『ことばの世界』6：41-69（愛知県立大学高等言語教育研究所年報）。
- 春木仁孝 (2012)：「フランス語におけるオノマトペ効果について」『川口順二教授退任記念論文集』：25-38。（ウェブ出版：<https://halshs.archives-ouvertes.fr/halshs-01511628> および冊子体の私家版、なお URL は当初のものから変更されているので注意）。
- 春木仁孝 (2013)：「フランス語のオノマトペ ―オノマトペの名詞性を中心に―」『時空と認知の言語学』II：49-58。（言語文化共同研究プロジェクト 2012、大阪大学大学院言語文化研究科）。
- 春木仁孝 (2017)：「直喩的な日本語・隠喩的な日本語」『時空と認知の言語学』VI：31-40。（言語文化共同研究プロジェクト 2016、大阪大学大学院言語文化研究科）。
- 春木仁孝 (2020)：「現代フランス語のオノマトペと構文」*Correspondances* コレスポンダンス（北村孝教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集）：775-787。朝日出版社。
- Enckell, P. et P. Rézeau (2003), *Dictionnaire des onomatopées*. 584p. Paris, PUF.

¹⁴ *catimini* をギリシア語と関係づける説もあるが、ここでは取らない。なお、本稿で取り上げた表現の語源や起源については *Dictionnaire historique de la langue française*, sous la direction d'Alain Rey(2010), Paris, Le Robert.を中心に、適宜いくつかの辞書を参考にした。